

「自由間接話法とマンガのコマ構成」

出原健一（滋賀大学）

認知言語学では、人間の言語能力は独立しておらず、他の一般認知能力と相互に結びついていると考えられている。これが正しければ、言語も人間の文化的営みの一つにすぎないため、言語と他の文化的構築物との間に構造的並行性（以下、相同性）があることが予想される。実際に絵画や庭園様式などと言語との相同性についての論考がこれまでなされてきたが、本発表では、言語とマンガの相同性、具体的には英語の自由間接話法と、作中人物の主観を描くマンガのコマ構成について検討したい。

マンガにおける作中人物の主観を表現する手法に関わるものとして、マンガ表現論には少なくとも2つの概念がある。1つは竹内オサムが提唱した「同一化技法」（モンタージュ型）である。これは、最初のコマで（例えば何かに気づいた）一人の作中人物を描き、その次のコマでその人物の主観を表現する手法で、これにより読者はその作中人物の主観を共有することになる。このプロセスには共同注意(joint attention)が関わっていることにも注意したい。読者と作中人物が（疑似的ではあるが）共に同一のものに注目することで共感を生みやすくなるわけである。もう1つは泉信行の言う「身体離脱ショット」である。これは文脈上明らかに作中人物の「視え」が描かれているにもかかわらず、その「視え」の中に当人までも描かれているコマを指す。これを上記の同一化技法から捉えなおせば、同一化技法の1コマ目（客観視点）と2コマ目（作中人物視点）が1つのコマとして融合していると言うこともでき、実際に同一化技法の2コマ目が身体離脱ショットでさらにその次に主観ショットのコマが続くことで、客観ショット→身体離脱ショット→主観ショットという、徐々にかつなめらかに作中人物の主観に入り込むケースも多い。

マンガについて述べた以上のことは、英語の自由間接話法にも当てはまる点が多い。自由間接話法は語順や語彙的直示表現(now, here など)は直接話法的であるのに対し、時制や文法的直示表現（人称代名詞など）は間接話法的で、いわば語り手と作中人物の2つの視点が重なっていると言われているが、この点は身体離脱ショットと類似している。また同一化技法の1コマ目に関しては、自由間接話法でも作中人物の身体的動作や知覚を表す表現が直前に現れやすいことは多くの論者が指摘しており、同一化技法と同様、共同注意プロセスが成立していることも多い。

発表の際には、時間の許す限り多くの具体的資料を提示し、登壇者や参加者の方々と言語とマンガの相同性について意見交換できれば幸いである。